皇帝、帝王、そして大帝

ディア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某競馬小説の世界観に転生し、シンボリルドルフから続く皇帝の系譜を受け継ごうとするマグナデルミネ。そんな彼が如何にして史実・原作に抗うのかを描いた物語である

目　次

第１話　ラジオたんぱ杯３歳Ｓ　―――――――――　1
第２話　共同通信杯～日本ダービー　―――――――――　4
第３話　札幌記念～ドバイシーマクラシック　―――――――――　10
第４話　凱旋門賞連覇～有馬記念　―――――――――　14
マグナデルミネ解説～大百科編～　―――――――――　20

第1話　ラジオたんぱ杯３歳Ｓ

ラジオたんぱ杯３歳Ｓ。格はＧⅢの重賞。テイエムオペラオーが大暴れしている西暦２０００年にて俺は未来のＧＩ競走になるそのレースに出走していた。騎乗ではなく出走、つまり俺は騎手ではなくサラブレッドだ。

西暦１９９８年。一度人間として過ごしてきた俺はトウカイテイオーの息子として誕生、正確には転生した。

このトウカイテイオーという馬だがまさしく名前の通り帝王と呼ばれるに相応しい強さとドラマチックな競走生活から人気を集めた馬でファンも多い。俺もその一人で挫折をした時トウカイテイオーのことを思い出し立ち直り、トウカイテイオーのファンになった。

そしてトウカイテイオーが死んでから数年後、俺はネット小説を見つけた。それは【青き稲妻の物語】という競馬小説だった。文章力はともかく俺が気になったのはその内容と設定だった。その小説ではトウカイテイオーの最大のライバルだったメジロマックイーンが優遇されているのに対してトウカイテイオーが優遇されていないことだ。

メジロマックイーンが優遇されている理由はただ一つ。メジロマックイーン産駒――つまりメジロマックイーンの子どもであるシンキングアルザオが競走馬としても種牡馬要するに父親としても活躍しているのに対してトウカイテイオーは後継種牡馬を残したはいいがダートのマイルの馬という微妙なもので、作者もボロクソに叩いていた程だからだ。それでも現実よりもマシだがメジロマックイーンに比べると明らかに優遇されていない。唯一の救いはそのマイルの馬がリセットの父親であることだ。

そんなことを考えながら死んでしまったせいなのか、俺はその【青き稲妻の物語】の世界にトウカイテイオー産駒として転生してしまった。

何故そんなことがわかるかと言うと【青き稲妻の物語】に出てくる競走馬がいたり逆に宝塚記念馬ダンツフレームなどの史実馬がいないからだ。【青き稲妻の物語】の世界観は作者の都合により史実馬が存在しない場合が多く、ダンツフレームもその被害者の一頭だ。それ故にここが【青き稲妻の物語】の世界観の世界だと認識させられてしまった。

しかしだ、それでも異なる点が存在する。それは【青き稲妻の物語】でも存在した馬ジャングルポケットがこの世界ではいないことだ。俺が勝利を納めた札幌三歳Ｓでもその姿を見かけることなく、今回のラジオたんぱ杯３歳Ｓでも三番人気であることからどうやら俺はそのジャングルポケットの成り代わりらしい。

史実におけるこのレースの勝者は一番人気かつ後に白いセクレタリアトの渾名を持つことになるクロフネじゃない。歴代Ｓ（サンデーサイレンス）Ｓ産駒の中でもトップクラスの実力者アグネスタキオン。こいつこそこのレースの勝者で一言で例えるならリアルチート。【青き稲妻の物語】の作者ですら天才と評価していて、シンキングアルザオも二度に渡り敗北している。

「さあ最後の直線に入りましてクロフネがまだ先頭。アグネスタキオンとマグナデルミネが一気に捉えにかかった」

あ、言い忘れていたがマグナデルミネってのは俺のことだ。テイオーの息子だからラテン語で大帝を意味するマグナを俺の名前に着けたらしい。

それはさておき、先頭に立ったアグネスタキオンを抜かすべくここから加速し一気に仕留める。アグネスタキオンは確かに速い。しかし瞬発力では俺に劣る。史実での勝者がわかるが故にマークしてい

た。そして加速すると目の前にいたアグネスタキオンが更に伸びた。
……は？　何だよそれ？
「アグネスだ、アグネスタキオンが突き放す！　アグネスタキオン今一着でゴールイン！　二着にマグナデルミネ！」
　嘘だろ……射程圏内でも勝てないってどういうことだよ。ジャングルポケットが瞬発力を武器にしていたように俺も瞬発力を武器にしている。実際史実のアグネスタキオンよりも上がり３Ｆラスト６００ｍのタイムのことは俺の方が速く３３秒２でレースタイムは２分を切っておりこちらも史実のアグネスタキオンよりも速かった。
　しかしこの世界のアグネスタキオンはその上を行き、俺より前にいたにも関わらずその瞬発力で俺を捩じ伏せた。こんなんチートや、チート！　史実補正仕事しすぎだゴラァ！

第2話　共同通信杯～日本ダービー

それから俺は共同通信杯にて勝利を納めたものの、不安材料があるとのことで別の厩舎競走馬は調教師によって管理されその調教師が管理する所を厩舎というの馬と併せ馬をすることになった。

最強世代の二冠馬セイウンスカイ。セイウンスカイはマグナデルミネこと俺が産まれた年に皐月賞、菊花賞を制覇している。そんな二冠馬だが一昨年屈腱炎により長期休養。通常であれば引退の可能性もある屈腱炎だが復帰して成功する見込みがあった為に引き続き現役を続行した訳だ。

セイウンスカイの得意レーススタイルは逃げだが最後に勝利した札幌記念では差している。逃げ馬で知られるミホノブルボン史上５頭目となる無敗で皐月賞と日本ダービーの二冠を勝利した馬も新馬戦で追い込んで勝ったんだからレアケースだがない訳ではない。

強度は一杯出来る限りの最高強度との指示だったからそのセイウンスカイに徹底的についていき最後は突き放すという質の悪い併せ馬だ。

全盛期のセイウンスカイならともかくここにいるセイウンスカイは全盛期からかけ離れており、【青き稲妻の物語】ではどうかは知らないが史実では天皇賞春でテイエムオペラオーに１６秒弱遅れてゴールしていてついていくのは楽勝だ。

「どうもありがとうございました」

「いえいえ、セイウンスカイの方も調整が出来ましたのでお互い様です。まあ結果はセイウンスカイの惨敗でしたが」

「いやいや負けてなお強し、流石最強世代の二冠馬でした」

「マグナデルミネは皐月賞、セイウンスカイは天皇賞春を勝ちましょう」
「ええ」

そしてトライアルレースに参加することなく俺は皐月賞に直行した。そこには無敗で朝日杯3歳Sを勝ったシンキングアルザオ、そしてラジオたんぱ杯で俺に勝ち弥生賞でシンキングアルザオに勝利したアグネスタキオンがそこにいた。

無敗で弥生賞を制したアグネスタキオンが不動の本命で二番人気は僅差で弥生賞二着のシンキングアルザオ、そして俺は三番人気となっていた。史実ではジャングルポケットが二番人気だったが史実で朝日杯を勝ったメジロベイリーとは違いこのシンキングアルザオは無敗で朝日杯を制している。しかも距離が伸びれば伸びるほど強くなる血統背景も関わってくるから二番人気に指示されたんだろう。

しかしそんなことはどうでもいい。このレースで勝つのは史実でも【青き稲妻の物語】でもアグネスタキオンが勝つということだ。

前回戦った時はアグネスタキオンが勝ったがそれはアグネスタキオンの方が瞬発力に優れていたからだ。となればアグネスタキオンよりも先行しリードを取って逃げ切るしかない。アグネスタキオンから逃げ切ればシンキングアルザオも怖くない。

とにかくアグネスタキオンよりも先に行く。そのことばかり考えながらゲートに入りゴールに意識を向けるといつの間にかゲートが開いていた。

「ああっと、マグナデルミネ出遅れたぁっ！」
やらかした！　俺はジャングルポケットとは違いマグナデルミネという馬だから出遅れないなんて考えていた。だが俺はジャングルポケットの成り代わりでここにいる。実際フジキセキの厩舎だったし。
そんなことはどうでもいい！　とにかくアグネスタキオンより先行しないと……ってジョッキー手綱を抑えるな！　俺の瞬発力を生かしたい気持ちはわからなくないがそれだとアグネスタキオンに勝てねえ！

結局こんな状態で勝てるはずもなく皐月賞は三着。アグネスタキオンはおろかシンキングアルザオにまで先着されてしまった。
むしろ史実のジャングルポケットよりもアクシデントが多かった俺にしてはこれでも頑張った方で通常であれば掲示板5着以内の順位のこと。電光掲示板は5着以内しか表示されないためそう呼ばれるに載ることすら出来なかったかもしれない。

「今回のマグナはやたらかかっていたな？」
「はい。何故か前に行きたがりまして……ギリギリのところまで抑えましたが却ってそれがよくありませんでした。前にアグネスタキオンやシンキングアルザオといった有力馬がいたことを考えるともう少し先行させるべきでした」
「次のダービーは勝てそうか？」
「アグネスタキオンは底が見えてきたので怖くありませんが、問題はシンキングアルザオの方です。弥生賞の頃よりも強くなっています。距離が延長されたらアグネスタキオンよりも強いかもしれません」

「ならそれ以上の相手と併せ馬をしないとダメか」

皐月賞から数週間、いよいよ仕上げにかかるといったところで別の厩舎の馬と併せ馬をすることになった。その馬の名前はテイエムオペラオー。

前回の別の厩舎の併せ馬はセイウンスカイだったが今回のテイエムオペラオーは一味も二味も違う。

史実・原作通りテイエムオペラオーは産経大阪杯で負けたものの天皇賞春を勝ち、GI競走7勝目を挙げて昨年同様現役最強馬そのものだ。

そんな化け物と併せ馬をしても大丈夫なのか？　と思いがちだが厩舎の目標はアグネスタキオンを超えることであり、アグネスタキオンを超えるにはそれ以上の馬と併せ馬をする必要があるってことだ。現役で素質・実績ともにアグネスタキオン以上の馬といえばテイエムオペラオーしかいない。

向こうも日本ダービー有力馬と併せ馬が出来ると言うことで快く引き受けてくれた。

今回もセイウンスカイと併せ馬をやったように一杯で模擬レースのようになっている。

「流石日本ダービーの有力馬なだけありますね。オペラオーが真面目に走るのはいつものことですが、あそこまで他の馬を意識して走るのは初めて見ましたよ」

「メイショウドトウと言った馬よりもですか？」

「ええ。マグナはなんというか見た目こそ父親に似ていますが威圧感

が祖父のシンボリルドルフと似ているせいでしょうかね。オペラオーはそれに気づいているんでしょう」

約一ヶ月後。ついにこの日がやって来た。東京優駿、通称日本ダービー。史実のジャングルポケットはここを制したが【青き稲妻の物語】ではジャングルポケットを破りシンキングアルザオが制覇。こちらの世界では……と、こんなことを考えているから出遅れる。この日本ダービー時点でシンキングアルザオは瞬発力を備え付け、史実では東京競馬場無敗のジャングルポケットを差し返している。皐月賞時点のアグネスタキオンを上回る実力があると言っていい。

やはりというべきかシンキングアルザオは逃げの一択で俺は中団で差しにいくスタイルだ。追い込みや先行も出来なくないがそれをやると折り合いがつかない。

「先頭はシンキングアルザオ！　やはり強い！　マグナデルミネも凄い脚だ！　皐月賞二着馬と皐月賞三着馬の対決だ！　クロフネはきついか!?　未だにシンキングアルザオが先頭！」

流石【青き稲妻の物語】で驚異の連対率１００％、ＧＩ競走７勝を飾った競走馬なだけある。逃げ馬とは思えない程の瞬発力だ。

「しかしこれは差せるか!?　マグナが差した！　しかしアルザオ差し返した！」

だが俺だって何もしていない訳じゃない。そんなシンキングアルザオに勝つにはそれを上回る瞬発力が必要だ。

具体的にはミホノブルボンが坂路で鍛え上げたように俺も坂路を１日４本坂路は１本から２本が普通で３本でも多い。前述したミホノブルボンは１日４本というぶっ飛んだことをしていたに増やしてもらえるようにやせ我慢して涼しい顔をしたり坂路が２本で終わる

ようなら突っ立って動こうとせず抗議した。

「マグナデルミネ、更に差し返した！」

シンキングアルザオは瞬発力を身につけることで勝負根性をより発揮するようになった。なら俺も同じだ。向こうがギアを変えて加速して勝負根性を発揮するならこっちは三段階に変えて加速してやる。

「マグナが伸びる伸びるゴールイン！　２１世紀最初の日本ダービーを勝ったのはマグナデルミネ！」

ようやく俺の存在そのもの以外で【青き稲妻の物語】の原作改変が出来た。

第３話　札幌記念～ドバイシーマクラシック

それから俺はジャングルポケット同様に札幌記念に出走したが、史実のジャングルポケットはここで三着とまさかの敗北をしてしまう。

しかしそれは勝った相手がわからなかったらの話であり、俺はこの時の勝者が誰だか知っており、騎手も俺のことを信用してくれたおかげで折り合いもついたおかげで徹底的にマークし８馬身差で圧勝。

日本ダービー勝利、そして今回の札幌記念の圧勝劇に陣営は俺が覚醒したと見て菊花賞ではなく凱旋門賞に出走登録し、俺もそれに賛同した。

ちなみに俺が賛同しないと馬房から一切動かなかったり噛みついたりする。

さてロンシャンにやって来た訳だが、史実での凱旋門賞の勝者はサキーというドバイ所有の馬で当時の凱旋門賞史上最大着差タイの６馬身差という着差をつけて圧勝している。

サキーに勝つには先に勝つ、サキーだけに……うん、ボルトチェンジが聞いたら腹抱えて笑うくらい下らないギャグだ。

それは置いておいて、ここロンシャン競馬場は所謂洋芝である上に重馬場とタイムが非常に出せない状態であり、欧州で実績を出しかつ重馬場を得意とするサキーにとってはかなり有利な状況だ。

そのサキーの戦法だがシンキングアルザオと同じく逃げ先行を得意としているが、今回に限れば別で大外枠で逃げが出来ない状況にある。無理にすれば惨敗してしまうだろう。

史実でも無理せずに控えたからな。しかしそれが俺が唯一のアドバンテージでもある。

「さあ第８０回凱旋門賞スタート！」

やはりと言うべきかサキーは好位を追走し、俺はその真後ろについ

ていた。
何故ならこの戦法は位置取りこそ少し前だがアグネスタキオンとほぼ同じで幾度なくやられた戦法だからだ。例え射程圏内に入っていても置き去りにされてしまう。
その為こいつが少しでも動こうものなら距離を詰めて差しにいく。俺にとってアグネスタキオンはトラウマである。
「さあ我らが日本のマグナデルミネは一番人気のサキーを追走しています」
普段であればこういうリスキーなことはしないがアグネスタキオンやシンキングアルザオ以上の馬に勝つにはそれにあった競馬をしなければならない。
っとそろそろ動くな。いつでも外に出て差しにいくポジションにつかないとな。
「さあここでサキーが動いた、そしてそれに続いてマグナデルミネも動き……サキーを抜かしました！」
直線に行く前に動いてその馬の前に行くことは本来であれば挑発行為でしかない。しかし今回は勝つ為にやっている。
偽りの直線（フォルストレート）を通過する頃には既に先頭に立ち押し切りを狙うしかない。
「直線に立ってマグナデルミネ、マグナデルミネが先頭！　サキーが二番手に変わりマグナデルミネを差しにいく！」
最後の直線は坂こそないが東京競馬場以上の長さを持ち、ここが俺の長所をいかせるところだ。
俺の長所は瞬発力が冴えているという点と、直線が長い程有利な点だ。
瞬発力については日本ダービー前から鍛え上げたものだが直線が長い程有利なのは俺の走法が直線において一番加速しやすいストライド走法だからだ。
その二つの要素が合わさればいくらサキーが欧州で慣れていてかつ重馬場でも本来の戦法でなければ勝てる。
「マグナデルミネが伸びる、迫るサキー、後ろからゴーランがやってく

るが全く伸びないっ！」
この勝負はもはや俺の勝ちだ。
サキーは皐月賞時点のシンキングアルザオと同じくらいの瞬発力しか備えていない。
普通の馬ならそれでぶっちぎれるが、アグネスタキオンや今の俺に叶う術がない。
ということなので無情にもぶっちぎり、４馬身差で勝利した。
「やりました！　マグナデルミネ、史上二頭目の日本馬による凱旋門賞制覇を果たしました！」
史上二頭目……？　ああ、アイグリーンスキー【青き稲妻の物語】に出てくる主人公の父親。詳細は【青き稲妻の物語】参照。のことか。
史実では日本馬による凱旋門賞馬がいないからすっかり忘れていた。

「やっぱり正解でしたね。三歳馬でアイグリーンスキーが凱旋門賞を制したからマグナもワンチャン行けると思っていましたが、まさかここまで差をつけて勝利するとは思いませんでしたよ」
「もしサキーがいなければ凱旋門賞史上最大着差を更新したかもしれないな」
「ええ。しかし今はマグナが凱旋門賞を制したことを喜びましょう」

そして史実のジャングルポケットと同じくテイエムオペラオーを破りＪＣを制した俺は年度代表馬になり翌年を迎える。
次走は阪神大賞典ではなく今年からＧＩ競走に昇格したドバイシーマクラシックに出走し、そこを難なく勝利したもののまさかの故障発生。

凱旋門賞にはギリギリ間に合うが一度帰国して治療を受けることになった。

それはともかくあれからライバル達はどうなったかというとシンキングアルザオは天皇賞春で有馬記念馬マンハッタンカフェやオペラオー世代の菊花賞馬ナリタトップロードをねじ伏せ制覇。

しかし【青き稲妻の物語】では勝つはずの宝塚記念では史実・原作を知る者ならあり得ないと叫ぶ事態が発生して2着に惜敗した。

そのあり得ない事態とはアグネスタキオンがまさかの引退せず現役続行し、宝塚記念に出走していたことだ。

宝塚記念でシンキングアルザオに鼻差とはいえ勝利し天皇賞秋も勝利して連勝記録を伸ばした。

ちなみにマンハッタンカフェは【青き稲妻の物語】と同様に菊花賞と天皇賞春を勝っていないので、凱旋門賞に出走することなく宝塚記念に出走し3着に善戦したものの京都大賞典で屈腱炎を発症し引退した。

まあ京都大賞典は凱旋門賞とほぼ同じ時期だから史実通りと言えばそうなんだがな。

第４話　凱旋門賞連覇～有馬記念

そして治療が終わり凱旋門賞を連覇して二度目となるＪＣに挑む。ただ今年のＪＣは例年とは違って俺の得意とする東京競馬場ではない上に距離も２４００ｍではない。

この年の秋、東京競馬場はコース改修工事の影響で使えなくなり代わりに東京競馬場で行われるレースは中山競馬場で行われることになる。

史実ではこれでナリタトップロードやジャングルポケットが勝てずに悲惨な成績になってしまった。

だが俺は中山競馬場が苦手な訳ではない。実際中山競馬場と同じく右回りの凱旋門賞を二度も勝っているし成績や血統背景から考えてもスタミナもある。

シンキングアルザオやアグネスタキオンが当時強すぎたってだけの話だ。

だがあいつらに勝てるだけの瞬発力と位置取りの確立は済んでいて勝ち目はあの時よりもある。

史実ではファルブラブが勝つがあいつの動きは参考にならん。

何せ原作で勝ったシンキングアルザオの方があまりにも格上な上に今回は史実・原作共に引退しているはずのアグネスタキオンがいてそちらにも注意しなければならない。

史実の天皇賞秋を勝ったシンボリクリスエスがレースどころかこの世界にはいない為、何が起こるか不明だ。

「さあいよいよ昨年のクラシックを盛り上げた三強が再びこの中山競馬場で相見えます」

「未だ無敗の皐月賞馬アグネスタキオン。そして凱旋門賞を二度も制した日本ダービー馬、マグナデルミネ。そして連対率１００％の最強ステイヤー、シンキングアルザオ。どれも捨てがたいですね」

「その他にもＫＧⅥ＆ａｍｐ；ＱＥＳを制したゴーランやオペラ賞を

制したブライトスカイも侮れません」
「各馬ゲートインしました。さあ第２２回ＪＣスタート！」

ゲートが開き、最初に行ったのはやはりシンキングアルザオ、中団に控える形でアグネスタキオンだ。
アグネスタキオンは怪我があって弱体化しているとはいえ【青き稲妻の物語】では古馬になってから無敗のシンキングアルザオを破っていて油断出来る相手ではない。
むしろ最大の驚異であり俺からしてみればアグネスタキオンの方がシンキングアルザオよりも上だと思っている。
それは観客も同じでアグネスタキオンが２番人気に対してシンキングアルザオは３番人気であるのが何よりの証拠だ。
ちなみに１番人気は何故か俺で、観客は俺を過大評価しすぎている。

「さあここでアグネスタキオンが動いてそれに続くマグナデルミネ。そしてシンキングアルザオも仕掛けてきた！」
昨年の凱旋門賞と同じく、一番の有力馬だと思った相手――今回であればアグネスタキオンをマークし動くタイミングで動く。
「直線に入ってまだシンキングアルザオ先頭、粘るシンキングアルザオ、追い詰めるマグナデルミネ、アグネスタキオン」
よし、アグネスタキオンの伸びは悪い。
残るは先頭にいるシンキングアルザオだけであいつに勝つには心臓破りの坂までに並ばないと勝つ可能性が低くなってしまう。
それと言うのも俺自体があの二頭に比べてパワーが不足しており一馬身以内でないと差せなくなってしまうからだ。
四馬身、三馬身、二馬身、一馬……届かないっ！
「マグナデルミネが追い詰める！　逃げるシンキングアルザオ！」
あと半馬身、半馬身欲しい。そう願わずにはいられない。だが予想外の事が起きた。
「マグナデルミネ、シンキングアルザオに並んだ！」

それはシンキングアルザオの伸びがいつも以上に悪いことだ。いやアグネスタキオンや他の奴らも伸びが悪い。もしかして本当に克服したのか？
「さあマグナデルミネ先頭だ！」
残り１００ｍを切った時点でシンキングアルザオ、アグネスタキオンの二頭の顔が俺よりも後ろにある。
この勝負貰った！
「シンキングアルザオ一着！　二着にアグネスタキオン、三着にマグナデルミネ」
……くそ恥ずい。何がこの勝負貰っただよ。
あの後二頭が失速した俺を置き去りにし、結果は三着。手も足も出なかった。
それはそうと原作通りシンキングアルザオが勝ちイレギュラーのアグネスタキオンや俺が敗北したことを考えると普通なのかもしれない。

「やっぱりあの二頭は強いですね」
「マグナは一度アルザオに勝っているんだがやはり東京競馬場じゃないと駄目なのか？」
「いえ、マグナの顔を見てください」
「……っ！　涙を流している、のか？」
「ええ。もしこのまま有馬記念に出走せずに引退もしくは別のレースに使うようであればマグナは馬房の中から出ないでしょう。そしてこの悔しい気持ちは私も一緒です。今度の有馬記念、絶対にマグナの無念を晴らしましょう」

そして有馬記念。俺、シンキングアルザオ、アグネスタキオンは共に今年ＧＩ競走２勝。この有馬記念の結果次第で年度代表馬が決まる。
「さあいよいよ今年最後のＧＩ、有馬記念が始まろうとしています」
「今年の本命はシンキングアルザオ、対抗にアグネスタキオンと言ったところでしょうか？」
「そうですね、マグナデルミネも例年なら本命視されてもおかしくはないんですがあの二頭が相手ですからね。有馬記念開催場所が東京競馬場ならまだしも中山競馬場で行われるとなると厳しいものがあります」
「グランプリ連覇か、父仔三代有馬記念制覇かそれとも父の無念を晴らすか、それとも大波乱が起きるのか……いずれにせよ２１世紀が始まったばかりとは思えないドラマチックなレースになりそうですね」

「各馬ゲートイン完了しました。第４７回有馬記念スタート！」
そしてゲートが開き、テンプレあるいはマニュアル通りシンキングアルザオがハナに立つ先頭に立つことと俺は中団で控えるアグネスタキオンの後ろについた。
アグネスタキオン、シンキングアルザオ共に連対率１００％の名馬だ。
有馬記念で史実・原作ともにどちらも走っていないからどちらが強いかは不明だし、種牡馬としての成績から見ても予測がつかない。
何故ならアグネスタキオンは有馬記念を制するダイワスカーレットを輩出するし、同じくシンキングアルザオも有馬記念を制するマジソンティーケイを輩出。
競走馬としても種牡馬としても予測がつかない故に俺はシンプルに自分のレーススタイルに戻すことにした。
「さあここでアグネスタキオンが動いたがマグナは動かない、まだ動かないぞ」

１６００ｍを通過し、残り９００ｍを切った段階でアグネスタキオンが動くが俺はまだ我慢していた。騎手が俺を必死に押しているがまだその時じゃない。
残り８００ｍを切った段階で動き、アグネスタキオンとシンキングアルザオを捕らえに行く。それこそが俺の本来のレーススタイルだ。
「さあ最終コーナーを通過し、シンキングアルザオが未だに先頭。アグネスタキオンがシンキングアルザオを捕らえに行った！　マグナデルミネはまだ来ないっ！」
よし、今だ。しっかり捕まっていろよ相棒。一歩を強く踏み出し加速するとそれまで見ていた景色が止まって見える程の景色が映る。
それまでの一歩の歩幅はトウカイテイオーと同じようなものだったが、今はそれを遥かに超えるものでありながら脚の回転数は変わらない。
それどころかもっと速くなっていてディープインパクトのような状態になっている。
かつて強敵だと思っていたシンキングアルザオやアグネスタキオンすらも軽々と抜いてしまった。
「大外から来た、大外からマグナデルミネが飛んで来た！　帝王の仔が今、光輝く大帝へと進化した！」
有馬記念を３馬身差で勝利。スペシャルウィークが元のレーススタイルに直したことによって安定感がついて改善されたのと同じく俺もそうしてこの結果に繋がったんだろう。

「やりました先生！　ついにあの二頭の土俵で勝ちました！」
「ありがとう、これでフジキセキにも胸を張って会える……」
「マグナには感謝の言葉しかありませんね……何せ当初の目標の日本ダービー、ＪＣ、凱旋門賞連覇、そして有馬記念という有終の美を飾れた名馬なんですから」

それから俺とアグネスタキオンはあの有馬記念の直後に引退し種牡馬として生活を送ることになった。俺はともかくアグネスタキオンは仕方ないよな。

ただでさえ一頭のＧＩ馬を犠牲にしているのにこれ以上引退時期を伸ばしたら歴史的名牝馬（ダイワスカーレット）がいなくなる。

俺の血統は母父にリアルシャダイ、母母父にマルゼンスキーが含まれておりノーザンダンサーやヘイルトゥリーズンの血が少し濃くなってしまうのが欠点だがそれでも凱旋門賞を連覇した歴史的名馬なだけあり結構な数の牝馬と肌合わせすることになる。

その中にはリセット【青き稲妻の物語】に出てくる馬。詳しくは【青き稲妻の物語】参照の母親も混じっていて俺がリセットの父親になったことが一番の原作改変が起きた。

尚、シンキングアルザオは原作通り現役を続行したが何故か怪我が起こらず天皇賞春、宝塚記念、天皇賞秋、ＪＣ、そして有馬記念の古馬中長距離ＧＩ競走を完全制覇。連対率１００％、ＧＩ競走９勝と原作を超える戦績を出して引退。

種牡馬としても優秀で、種牡馬として活躍した俺達の中でも一番の成績を残した。もちろんその中には原作にて天皇賞父仔五代制覇を果たしたマジソンティーケイもいたが、何よりもシンボリクリスエスがいないことから変わりに種付けられることがあり、こちらの世界のエピファネイアはこいつの息子だったりして一番の史実改変と言うべき存在になっていた

マグナデルミネ解説～大百科編～

マグナデルミネとは１９９８年生まれの競走馬。アグネスタキオン、シンキングアルザオと共に競馬ブームに火を着けた名馬である。

概要

父トウカイテイオー、母父リアルシャダイ、母母父はマルゼンスキーと健康に不安がありそうな血統であり、関係者も故障を気にしていたが、素質は高く買われており「父トウカイテイオーやフジキセキを超える」と評判だった。

新馬戦では天皇賞馬メジロブライトの半弟であり朝日杯三歳Ｓ２着馬メジロベイリー等多数の有力馬を蹴散らして勝利し、その後札幌３歳Ｓも勝利を飾る。

ラジオたんぱ杯３歳Ｓでは、レコードを２回も更新したクロフネ、ダービー馬アグネスフライトの弟でもあるアグネスタキオンについでマグナデルミネは三番人気に支持され、２着に食い込むが、アグネスタキオンとマグナデルミネは２分を切るタイムでゴールを駆け抜けており、３着のクロフネも従来のレコードを更新するタイムで駆け抜けており、クラシックの有力馬として名を上げるが、まだこの時でも役不足であった。

共同通信杯で勝利を納めた後、陣営は皐月賞に登録するが、朝日杯三歳Ｓを無敗で制し、弥生賞でも二着と善戦した有力馬シンキングアルザオが逃げ馬であることと、同じ厩舎の中で併せ馬をする相手がマグナデルミネに対して萎縮してしまう為に、別厩舎かつシンキングアルザオと同じく芦毛の逃げ馬セイウンスカイと併せ馬をすることになった。

このセイウンスカイは９８年の二冠馬であり、既に引退してもおかしくないのだが引退していなかったのは理由がある。９９年の天皇賞秋の後故障し、出走すらままならなかったのと、スペシャルウィー

クやグラスワンダーと言ったセイウンスカイの同期に比べるとセイウンスカイはあまりにも成績が乏しかったのが理由で実績を積み重ねるべく怪我から復帰し、ビッグタイトルを狙っていた。

そのセイウンスカイを復帰させる為にマグナデルミネに白羽の矢が立った。最初のうちは順調であったがセイウンスカイが徐々にマグナから離れていき、併せ馬を中断しかけるが最後まで続けた。セイウンスカイがバテているのに対して最後までマグナデルミネはけろっとしていて関係者達を驚かせた。尚、その後セイウンスカイは心が折れたのか天皇賞春にて勝者のテイエムオペラオーに16秒差もつけられ惨敗している。

そんな併せ馬をして万全に挑んだ皐月賞だが、まさかの出遅れ。騎手とも折り合いが合わず勝者のアグネスタキオンはともかくシンキングアルザオにも遅れを取ってしまい3着確保が限界だった。もし出遅れがなく、折り合いがついていれば皐月賞を勝利出来る差だけに残念だった。

この敗北から関係者は鬼のようにマグナデルミネを鍛え上げる。具体的には坂路の本数を4本にしており、これはガチムチモンスターことミホノブルボンと同じ本数でありそれをこなせる馬はミホノブルボン以来現れなかったがマグナはそれでも涼しい顔をしていて逆に本数が少ないようなら動かずにいた。

もちろんそれだけではなく更に当時日本最強馬テイエムオペラオーと併せ馬をし、これ以上ない状態で仕上げる。尚、オペラオーもその後先頭で走ることはなくなってしまうのだが。

そして日本ダービー当日、逃げるシンキングアルザオを差し切り、21世紀初となるダービー馬となり、父子三代ダービー制覇、フジキセキの無念を晴らすと言った記録及び記憶に残る日本ダービーであった。

日本ダービーの出走後は札幌記念を8馬身差で勝利し、この圧勝を

切欠に凱旋門賞に向かう。しかし凱旋門賞と言えばアイグリーンスキーのみしか突破出来なかった鬼門であり、スピードシンボリをはじめとした日本が誇る最強馬が次々と蹴散らされておりそれは最強世代の中でも最強と名高いエルコンドルパサーも例外ではなくモンジューに敗北している。アイグリーンスキーにしたって相手に恵まれていたと言うのもあり、ラムタラに凱旋門賞で敗北していて彼がいなければ凱旋門賞４連覇をしている。

しかもこの年絶好調のサキーをはじめとした超一流の競走馬が集まっていて決して低レベルとは言いがたい凱旋門賞だった。血統背景も日本では通じても世界では無名に近く、オッズこそ倍率が低かったがこれは日本の応援団が影響しており人気はあってないようなものであり、地元の新聞では穴馬扱いされていた。

凱旋門賞当日、馬場も重馬場であり、サキーの得意舞台となったロンシャン競馬場。唯一サキー陣営が不安がったのは大外枠であり逃げの戦法が取れなかったこと位しかなかった。マグナデルミネはその隙を逃すはずもなく逃げずに先行程度に控えるサキーの真後ろにつき徹底的にマークし４馬身差で圧勝する。二着のサキーは三着のアクアレリストに６馬身差をつけていたことから決してサキーが弱かったということはなく地元のフランスは当然、世界各地で話題になった。

凱旋門賞と手土産にＪＣに出走することになったが、ここでも巨大な壁に立ちふさがる。この時点でＧＩ競走７勝の実績があるテイエムオペラオー、そしてそのライバルメイショウドトウ、ナリタトップロードをはじめ当時の世界最強馬ファンタスティックライトをドバイシーマクラシックで下したステイゴールド等所謂日本最強の古馬達と対決することになる。しかしテイエムオペラオーら日本最強古馬達を自慢の末脚で打ち負かし世代交代を受け入れさせ、有馬記念を回避し休養する。勿論この年の年度代表馬に選出された。

休養明け早々、マグナデルミネは阪神大賞典ではなく昨年ステイゴールドが勝ったレースでありＧＩに昇格したドバイシーマクラシックに出走する。ドバイシーマクラシックに出走した理由についてだがテイエムオペラオーが一切海外に出走せず国内で終わらせてしまったことによる影響、海外で実績のあるマグナデルミネが国内に専念する理由はほとんどないからで決してライバルを避けた訳ではない。レースの結果こそ難なく勝利するが故障し、日本に帰国。このシーズンを棒に振る。

そして二度目の凱旋門賞は昨年よりもレベルが低いこともあり故障明けと言えどもマグナデルミネが負けるはずもなく難なく連覇達成。凱旋門賞連覇を達成した例はアイグリーンスキー以来で４年振りであり、またしても日本馬が連覇を達成するという記録を残す。

凱旋門賞を二度も制したのだから次は最大のライバルでもあるアグネスタキオンもシンキングアルザオに勝てる確証を感じたのかＪＣに出走。しかしこの年のＪＣは異例で中山競馬場で行われるだけでなく距離も２２００ｍと昨年のＪＣや凱旋門賞よりも距離が短くなっていて、この距離を走ったことのないマグナデルミネに対して他の二頭は宝塚記念での経験があり不利に思われたが一番人気に支持される。最後の直線で一瞬だけアグネスタキオン、シンキングアルザオを抜かし、勝ったと誰もが確信したがその後失速し二頭に抜かれ三着に終わり連勝記録は６で止まった。

そしてラストランとなった有馬記念。今度は三頭が共に未経験の距離であるがマグナデルミネは中山競馬場が苦手、シンキングアルザオがステイヤー、アグネスタキオンは中山競馬場が得意なことからシンキングアルザオが一番人気、アグネスタキオンが二番人気、マグナデルミネが三番人気となった。逃げるシンキングアルザオに中団差しのアグネスタキオン、そして追い込みのマグナデルミネと三頭が別々の位置取りをし最後の直線でアグネスタキオン、そしてシンキン

グアルザオを差し切る。この時のラスト３Ｆのタイムは３２．９秒と有馬記念史上最速のタイムでありあのディープインパクトすらも凌ぐ程と言えばその凄さが理解出来よう。

戦績は１３戦１０勝

主な勝鞍は凱旋門賞連覇、日本ダービー、有馬記念等、ＧＩ競走６勝。海外戦績は３戦３勝。先着を許したのがアグネスタキオン、シンキングアルザオのみアグネスタキオンやシンキングアルザオも共に先着を許したのは彼らだけであるという立派な成績である。